

### 31 熊野郎の空涙

毎年 天幕とライフル銃を持ち 呑気な白人たちが出かけて行く  
ミュティアーニー峠を越え 谷間で狩をするために  
毎年 ミュティアーニー峠を越え 白人たちについていく男が一人  
マタンという年老いた盲目の物乞いで 額から顎までぐるぐる巻きだ

目も無く鼻も無く唇も無く 歯も無いからろれつも怪しい 5  
戸口に立って施しを求め 一人語りをつぶやく  
繰り返し何度も語るあの話 始めと終わりはいつもきまって  
アダム・ザッド  
「露西亜熊に気を許すな 人間みたいに歩くロシアの熊野郎を！

「おれの小銃にゃ燧石ひうちいしがついていた 火皿ひざらにゃ火薬ひぐすり 非常時に備えた  
アダム・ザッドを狙うときはいつもそうだ 人間みたいに立つ熊野郎を！ 10  
深い森も深い雪もあの日が見おさめだったんだ  
五十年もむかし奴に出会ったあの夏の日が

「おれは奴が現れる時季と頃合いを知っていた 奴は奴でおれのことを知ってやがる  
夜には畑のトウモロコシを食らい 家に入ってパンを盗んで行きやがる  
おれは奴の力と姦計わるだくみを知っていた 奴もまたおれの力と知恵を知ってやがる 15  
奴は夜明けに山羊の囲いを襲い おれの寝ている間にかっさらっていきやがる

「山頂は近くの岩だらけの遊び場から 麓ふもとはうまく掘った巣穴から出てきちゃあ  
岩だらけの稜線をアダム・ザッドのロシア熊野郎は走りまわった  
吼え唸り叫び かすめとった肉で腹いっぱいにして  
北へ向かってまたもや長い旅 おれもすぐ後を追った 20

「北へ向かってまたもや長い旅 その二日目が暮れる頃  
おれは仇のアダム・ザッドと出くわした 奴は逃げまくり青息吐息  
小銃にゃ弾がこめてある 火皿ひぐすりにゃ火薬 非常時に備えた  
引き金に指をかけたそのとき 奴は人間みたいに立ちあがった

「恐ろしい毛むくじゃらの人間 それが祈るように両手を合わせていた 25

哀願しながらアダム・ザッドは立ち上がった  
奴の両肩が揺れ大きな腹がゆさゆさ揺れ動くのを見た  
おれの心はこの大きな懇願する奴に憐れみを覚えたのだ

「憐憫と畏怖に打たれたおれは発砲できなかった  
だからそれ以後 女を拝むことも 男と連るむこともなくなった 30  
奴はよるよると近づいてきた 手を合わせ拝むように  
とたん 蹄鉄をつけたような前脚で 額から顎にかけておれの顔を抉り取ったのだ

「一瞬で 音もなく 凄まじい 焼けつくようなその一撃  
顔を失ったおれは奴の足元に倒れた 五十年も前の話だ  
奴が唸りけたけた笑って 巢穴に帰っていく足音を聞いた 35  
奴はおれを盲目にして 暗黒の年月と無慈悲な世間に身をさらさせた

「その新式銃を持って 朝早く谷に降りるんだ  
どうやら元込銃と見た 射程は一マイルだそうだな  
白人のライフル銃に武運を！弾あしは速く狙はずれぬライフルだよな  
でもその前にご報謝を そうすれば包帯を解いて奴の仕業をお見せしよう」 40

(炉にできた新しい金糞かなくそのように ごつごつと引きつった灰色の傷跡  
年老いた盲目の物乞いマタンは 報謝に似合うものを見せた)  
「藪の中で奴の昼寝を襲え 追いたて急せき立てろ  
怒ろうが脅そうがひるむんじゃないぞ アダム・ザッドの奴を殺るときは

「だが（ご報謝を そうすりゃ 包帯を戻すよ）用心するんだぜ 45  
奴が疲れた人間みたいに立ち上がり よるよると近づくとときだ  
拝むように手を合わせて立ち上がり よるよると人間のように近づいてくる時だ  
憎悪わりだくみと姦計を奴の小さな豚の目に隠す時だ

「奴が慈悲を求めて 小金をせびるように両手を合わせた時  
それが危険なときだ 熊野郎を許してはいけない時だ！」 50

目も無く鼻も無く口も無く 戸口に立って施しを求める男  
年老いた盲目の物乞いマタンは 繰り返し繰り返し語る  
白人たちの新式ライフル銃をいじり 焚き火に手をかざし  
香気な白人たちが明日の首尾を語り合うのを聞きながら

繰り返し何度も語るあの話 始めと終わりはいつもきまって

55

「アダム・ザッドに気を許すな 人間みたいに歩く熊野郎を！」

(柗井幹生訳)